

Title	日本人と中国人の死生観を読み解く : 文化の違いに基づき、実践調査を参考に
Author(s)	徐, 静文
Citation	臨床哲学. 15(1) P. 35-P. 54
Issue Date	2013-10-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/26327
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本人と中国人の死生観を読み解く

——文化の違いに基づき、実践調査を参考に

徐 静文

はじめに

日本ではふつう「死生観」という言葉を使うが、中国では「死生観」という言葉は使われず「生死観」と言われる。現在中国において高齢化が急速に進んでいることに伴い、ますます「生死観」という領域が広がりつつある。単なる言葉の順序で言えば、前者は「死」に重点を置いて「生」が考えられるのに対して、後者は「生」に重点を置いて「死」を考えようとする傾向が見られる。ただ、「死生観」にせよ、「生死観」にせよ、いずれも「生」と「死」を同時に考えるという点では同じである。程度の差はあれ、生と死は不即不離に繋がっていると考えられているのである。実は「死生」（せいし）というのは『論語』に出てくるものであり、一方「生死」（しょうじ）は仏教の根本用語である¹。日本は中国よりも仏教が庶民の生活に浸透している度合いが大きい。このことを考慮すれば、日本でこそ「生死（しょうじ）観」という言葉が広まるはずなのに、日本人は「死生観」という言葉を馴染み深く使っている。逆に、中国は日本と比べて、孔子の思想が国民の精神に深く根を下ろしている。この事情からすれば中国では「死生観」という言葉が広まるはずだが、むしろ「生死観」という言葉がふつう使われるのである。ここには、日本人と中国人は「生」と「死」についての理解や考えや重要性などの問題に関して、それぞれ隠れた微妙な気持ちを持っていることが示唆されているだろう。従ってどのように考えるかということに応じて、日本人と中国人の死生観に相違が生じるのである。そこで、今回は日中の国民の生き方と死に方の根本に関わる歴史思想文化、宗教および社会的風俗習慣の相違を振り返ることによって、日中の死生観を読み解いてみる。

1. 日本人の死生観の表現

1.1 日本神話における生と死の考え方

(1) 神と人が1つになる；長命よりも美しい生をより重視する

日本の記紀神話には、国生みのことが記載されている。その伝承では、イザナギとイザナミという二神がいる。この二神は国生みをして、人間の生活に必要な食物を作り、人間の命を生み出した。人間は神によって生まれたため、人間と神の間には血縁関係がある。神を祖先として尊敬し、人間は神の子として神を超越してはいけないという仕方神と人が合一した。そして、その二神は国生みをする過程の中で、失敗したり、誤りをしたり、苦しんだりするなど、さまざまな試練を受けた。このような不幸や失敗などは人間的な出来事であり、日本の神は人間のような経験をしたことになる。このことから昔の日本の神は人間的で万能ではなかったということが見てとれる。ここからまた、昔の「日本人の生きざまにとって、失敗や誤りや不幸が必然であると認している」²ことも理解される。

続いて、天孫瓊瓊杵尊降臨^{ニギノミコト}についての神話をもとに、日本人にとって生命の長さや美しさはどちらがより重要なのかという問題について解釈する。清水徳蔵は「日中の死生観比較考—異文化への日中の対応比較(3)—」の中で以下のように述べている。「あの天孫瓊瓊杵尊の高天原からの降臨の際、笠沙の御前で、美しい美人のおオヤマツミノ神の次女のコノハナサクヤヒメを見染、結婚を申し込んだ。喜んだおオヤマツミノ神は姉イワナガヒメを添えて嫁に出した。ところが、姉のイワナガヒメが醜かったので、瓊瓊杵尊は姉を送り返えし、妹の美しいコノハナサクヤヒメをめとった。姉のイワナガヒメ(石長)は盤石のように長寿の御子を生むヒメで、妹のコノハナサクヤヒメは美しいが木の花のようにはかない子を生むヒメであった。日本書紀では、姉のイワナガヒメは恥じ恨んで、『この世の人は気の花のように俄かにうつろい衰え去るだろう』と言った。このように日本人は神話の時代から長命より、短命でもはかなくとも美しいものを求めてきたようである」³。もう一つの側面を見れば、この神話は日本人が「生」または生きざまに対して、美意識としての「物哀意識^{ものあわれ}」を持っていることを表している。これは日本人の「桜」の花に対する感情と合致していると言えよう。

(2) 「善」と「悪」を分離する；死を回避する

いかに生きるかということにおいて「善」と「悪」を分離する日本人の特徴は、記紀神

話における「悪」の神である「マガツヒ神」と「善」の神である「直日ノ神」が対立する物語に現れている。マガツヒ神は記紀神話に登場する災厄と死者の穢れを擬人化した神で、イザナギ神が黄泉の国から帰りその穢れを祓ったときに生まれたという。マガツヒ神が誕生した後に、その災厄を直すために直日ノ神が誕生している。この二柱の神は元々人間像を反映して対立している。つまり、悪人と善人が同時に存在しているということを認めて、悪事をはたらいでも祭事によってその悪を正すことができるということを表現している。このような善悪の二元が共存する人間像と生きざまは、日本人の死生観に大きな影響を与えていると思われる。善人が死後極楽世界に行き、悪人が死後地獄に堕ちるという仏教の教義が日本に入っても、その善悪二元が共存する生き方は変化しなかったからである。

記紀神話には生の世界に関する物語だけではなく、死の世界についての描写もある。その伝承によると、女神イザナミは日本の島々を生んだ後、最後に生まれた火神に女陰を焼かれて死んでしまった。男神イザナギは死んだ妻への想いに堪えかねて、死者の国を訪ねて行った。しかし、黄泉の国でイザナギは腐敗して蛆虫がたかった妻の死体の醜悪さに驚いた。恐怖に囚われた男神は、必死に黄泉の国から生の国へ逃げ帰ってしまう。この後、男神は汚れを除くために水辺（川か海）で身を洗い清めた。そのとき、一切の災厄の源泉であるマガツヒ神が出現した。この物語は、古代の日本人が死を恐れ、暗黒と醜悪の心象によって死の世界を捉えていたことを示している。古代の日本人は生と共に死も神によって与えられたものとして受け止めていたが、死は汚れであり死の世界も暗く怖いものとして忌避していた。従って、死者に接したり、喪や法事に参加したりすることが不潔であると考えた。

1.2 武士道精神における生と死の考え方

武士道は日本における中世期封建制度と共に発達した。武士は日本社会の独特な階級として、日本の精神や生活理論に深い影響をもたらした。その精神は日本人の死生観にも独特の形を与えてきた。日本の思想史の視点から見れば、「武士道はその特徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である」⁴と新渡戸稲造が言ったように、武士道は日本で生まれた「日本人固有の伝統的な道徳観」と言ってもよからう。武士道の根源は仏教、神道だけではなく、儒家の思想と訓戒も源泉であった。武士という社会的な階層を主君への忠義に向って束ねるために、儒家の「仁」、「義」、「礼」、「孝」という義務と倫理規範を吸収して、高潔な人格と道徳性をもつことが要求された。その「君主へ忠義を尽くす」という

儒家の政治道徳は武士道の重要な精神になった。

武士道の根本的な精神は「忠、義、勇、仁、礼、誠」という六つの言葉で括られる。その中で、「忠」と「勇」ということが日本人の死生観に深く関わるとされている。武士の絶対的な任務は主人のために自分の命を惜しまず、忠誠を尽くすことである。主人のなかでも天皇はそれぞれの武士の直接の主人として第一の位置に置かれた。天皇に忠誠を尽くし、あるいは主人の恩恵に報いるために、断固として死に立ち向かう。そして、武士は「生くべき時は生き死すべき時にのみ死する」⁵という覚悟を持っている。これも武士道の「勇」と呼ばれた。

また、武士の覚悟も日本人の死生観を連想させるものである。武士は自分の特殊な身分に縛られており、死ぬことは武士にとって逃れえない定めであった。君主または正義のために死ぬか死んだ後は極楽世界に行けるのかなどの問題にまったく関心を持っていなかった。いつでも自らの命を捨てる心構えをして、自分の責任を果たすことが武士にとって重要であった。これが武士の死の自覚であった。武士の覚悟は即ち死の覚悟だったのである。このような死についての態度と意識は武士の道徳原則として、日本の民族精神における重要な特徴であると認められる。

しかし、武士道の死生観においてはただ死に対する道徳原則だけではなく、「生」についての考え方も重要であった。日本の各時代によって、その死生観の中心は違った。中世は戦争の時代であったので、武士の死生観は「死」に重点が置かれた。近世は泰平の時代で戦死の可能性が低かったため、近世の武士の死生観は「生」に焦点を当てるようになった。この時代の武士は、死を思うことで生をよりよく有意義にしようとする態度を持つことが理想的であると考えていた。中世の武士が命より「忠、義」を惜しんだことに対して、この時代の武士は「廉恥」を重視した。武士としてふさわしくないことを絶対してはならないと武士が自らに厳しく要求する。この戒めによって、武士はただ課せられた公務しかできないが、毎日生を実感しながらいつでも死の覚悟をもって主君に仕えることができた。

日本の武士社会の発展とともに、武士道精神は日本の民族精神、民族文化に解けこみ、日本文化の中心になった。武士階級の死生観は日本の民族精神と文化の中で独特な思想になり、後の日本人の行為と考え方に深い影響を与えた。

1.3 日本神道と仏教における生と死の考え方

神道と仏教に関する思想と教義の伝承は日本人精神の根本的な源泉であると言われてい

る。神道の誕生と仏教の伝入以来、その二つの信徒は他の宗教の信徒より圧倒的に多かった。今でもその状況は変わっていない。日本各地に神社と寺があり、季節ごとの行事の際に神社や寺を訪ねる習慣が現在でもある。興味深いことは、参拝する人が神社であるか寺であるかをまったく気にしておらず、とりあえず参拝するのがよいといった具合に両者をはっきりと区別していないことである。このことから日本人は一つの宗教信仰に信仰を寄せるのではなく、同時に2種類以上の信仰を持つことがあるということが分かる。

更に、筆者が2011年に実施した「日本人の死生観についてのアンケート」⁶の報告からも、同時に複数の信仰を持っていると考えられる結果が得られている。調査により、宗教信仰がない172人の中で、71人が「人間は死後にも魂（霊）がある」と思っているだけでなく、人間は死後、天国や黄泉の国に行き、または輪廻転生することができると思っている。一方で、「宗教信仰がある」と答えた40人のうち、13人が「人間が死ねば魂（霊）もなくなる」と考え、人間は死後、土に帰ったり、物質になったり、無になったりしている。他にも、仏教を信仰しているのに「人間は死後、天国に行く」と思っている人がいた。また、キリスト教を信じているのに、「人間は死後、黄泉の国に行き、輪廻転生する」という考えを持っている人もいた。これらの結果から、日本人が持っている宗教観は不明確で混然としていると言えるだろう。森下直貴はこれについて「日本人の宗教性は曖昧であって、明確な信仰というより、実感に密着し漠然としている」⁷と述べている。

以上で述べたことは日本人の宗教についての基本的な態度である。次は日本人の宗教と死生観の関係について分析してみよう。

(1) 日本神道における「生」と「死」

日本の神道について、日本に生まれた日本固有の宗教と考える学者もいるし、中国の道教と日本の思想や文化が混ざり合った宗教と考えている学者もいる。しかし、神道がどこから発展してきたのかはここでは根本的な問題ではない。いま問うべきことは、その教義と思想が現在の日本人の死生観、人生観などどのような関係があるかということである。神道における神の捉え方に注目すると、日本の神は死ぬことが分かる。これは日本以外の多くの伝統的な考え方における神の不老不死と大きく異なる点である。これも日本人の死生観に影響を与える一つの要因であるかもしれない。例えば、日本の神話の中で最も早く死んだ神はイザナミであり、死んだ後、彼女の嘔吐物や排泄物から神々が生まれた。この考え方の由来は、主に死体に対する恐怖と当惑であると推測できる。更に、昔の日本人は

誰もが死ぬということを神の死を根拠に信じていた。

一方で、神でも人間でも死んだ後、他のモノになることは、「死」の転化という側面を表している。これは中国の道家の「死生気化」の思想における万物の転化、つまり「物化」と共通点があると考えられる。道家の思想に、「胡蝶の夢」ということわざがあるという。人間は死んだ後、無条件的、無限界的に他のモノになると道家の学者は思っている。従って、日本の神道は道家思想のように、自然主義の傾向を示していると言えるだろう。これについて、梅原猛は「神道が、自然の生への崇拜であり、多神教的であったにちがいない」⁸と考えている。

日本の神道には明確な教義や教典がないが、「浄明正直」（浄く明るく正しく直く）を徳目とする⁹。「浄明正直」の教義は、神道の祭祀活動により形成された神道の死生観の基本的な内容と特徴と思われる。「記紀」には、神々と日本の島々が生まれたと同時に、死、血、排泄物などの様々な汚れの形態と現象が満ちた。そのため、「禊祓」（穢れを除く祓い清めの行事）¹⁰という行事を行わなければ、神に感謝の気持ちを表すことができない。このような祭祀によって自らの精神と体を清めて正し、神に感謝と尊敬の気持ちを表すのである。「禊祓」という祭祀活動は、神の人格化と人の神格化を媒介するかけ橋であり、内の清浄と外の清浄の手段であり、神と人が一体になる過程である¹¹。一方で、人間だけでなく神でさえ死後汚れに満ちている黄泉の世界に行くからこそ、生きている時にできるだけ自分の体と心を浄清し、正し、神の加護を求める。このような神道の「浄明正直」の教義は、日本人が死後の世界から生を見る一つの考え方と行為の仕方であると言えるだろう。

(2) 日本仏教における「生」と「死」

飛鳥時代（6世紀）に仏教が中国を通じて日本に入ってから、その影響は現代まで脈々と受け継がれている。仏教の最も重要な役割は、どのように現世から往生へ入るかを人々に教えることである。苦しい現世から極楽に往くという「往生」の思想と因果応報の観念は日本人の死生観にとって新しい認識となった。その思想は死後苦痛を受けることなく極楽世界に入ることができるように、生前にできる限り善行を行うことを促している。これは昔の日本人にとっても現代の日本人にとっても、日常生活の基本的な倫理道德原則となっている。従って、「往生」という仏教の思想は日本人の死生観の中で、最も重要な部分になると言ってよいだろう。

また、仏教は「死生一如」と主張している。つまり、生は死であり、死は生であり、生

と死の間に境界はないという意味である。禅宗が日本に入ってから、この「死生一如」の思想が日本社会の独特な死生観になった。特に武士道精神の形成に深い影響を与えた。武士道の死に対する「覚悟」の思想と「腹切り」という行為は、この現世を否定し彼岸を追求する傾向の極端な現れ方である。禅宗の思想は、一度目標を決めれば前進しかないと道徳的に要求するため、武士道の精神を持っていることはある意味で死生を超越する覚悟を持っているということである。武士は長期の修行を積むことによって、苦痛から解き放たれて生きると同時に死に等しい境地へと至り「死生一如」に達した。「鎌倉期日本人は深い宗教的な体験を迫られ、(禅の影響を受けた)武士階級の死生観と(浄土教の影響を受けた)庶民階級の死生観が形成された(鈴木大拙の説)」¹²。

仏教が日本人の死生観に与えたもう一つの影響は葬儀である。今でも日本において火葬は主流である。『続日本紀』によると、日本で最初に火葬された人は僧道昭であり、文武天皇4年(700年)のことであるとされる。また天皇で最初に火葬されたのは持統天皇(702年)である。8世紀ごろには、天皇に倣って上級の役人、公家、武士にも火葬が広まった。元興寺文化財研究所研究部長の狭川真一(仏教考古学)は、火葬が盛んになった理由について、「中世以降については、高野山など各地の有名な寺に自らの遺骨を分けて納骨し、極楽往生を願った貴族たちの納骨信仰と関連がある」と推測する¹³。しかし、時代が移り変わって現代になり、日本人の葬儀と墓に対する意識は大きく変わった。例えば、葬式を近親者だけで済ませてしまう、あるいはしないという簡単な形式が珍しいものではなくなった。そして、散骨と樹木葬がでてきたことにより墓の形と習俗も多様化している。

このような変化については筆者の「日本人の死生観についてのアンケート」調査の結果からも判断できる。アンケートによると「葬儀」について、212人のうち73人(34.4%)が「簡単で厳粛な葬儀」、62人(29.2%)は「花だけに囲まれた葬儀」、57人(26.9%)が「葬式はなくてもよい」と答えている。墓の場所については、およそ半数が故郷または子供が行きやすいところであればいいと思っている。これは中国人の大多数がもつ「落ち葉は根に帰る」という考え方と共通すると思われる。日本と中国の文化においてある程度近い部分があるのだろう。しかし、残り半数の日本人は自分の墓が「どこにあってもいい」、「なくても構わない(子ども達に任せる)」、「ないほうがいい」と思っている。以上の回答を踏まえると、現代の日本人は葬儀について重視するものが変わっていると言えるだろう。

総合的に見れば、神道と仏教はどちらも日本人の死生観に影響を与えた二つの柱である。どちらの宗教も死後の問題に強い関心をもっている。神道において人間は死後黄泉の国に

行き、仏教では生前の善悪によって死後極楽世界に昇るか地獄に墮ちる。これらの思想は日本の社会と思想文化の発展に伴って意味を変えてきた。そして、日本の各時代の文化と溶け合って日本人に特有の死生観になった。現在の日本人はどのような人間でも、死んだ後神や仏などになるということを認める。これも筆者の「日本人の死生観についてのアンケート」の「日本人の死後に対する考え方」という項目に関する結果から見てとれる。回答によると85.5%の日本人は、生前の罪の有無にかかわらず、また死んで罪が消えるか否かにかかわらず、皆同じ末路をたどると考えている。これはまさに日本近世の国学において本居宣長が「いかなる人間も等しく、善人も悪人も死後はおしなべて皆暗く汚い『黄泉の国』へ赴く」¹⁴と述べているとおりである。しかし、本居宣長は、「〈凡人〉であっても、位の〈尊卑〉や心の〈智愚〉〈強弱〉などによっては死後も現世において位を高くしたり、心を強く智で満たすことが必要となる」¹⁵とも述べている。日本人は、生前の罪の有無や死による罪の消失にかかわらず、結果は同じだと考えている。しかし一方では、死後現世においても位を高くし、心を強く智で満たすことができるように、現世においてできる限り悪事を働かずに生きる心得が説かれているといえるだろう。

2. 中国人の死生観の表現

2.1 儒家思想における死と生の考え方

(1) 生を欲する；死を知る

『論語』の中に、「季路が神と鬼に仕えることについて孔子に聞いた。孔子が『人間のことにまだ仕えていないのに、なぜ鬼に仕える』¹⁶と答えた。また季路が『それでは、死のことを聞きたい』と聞くと、孔子は『生がまだ分からないのに、なぜ死を知る』¹⁷と答えた」¹⁸という記載がある。この答えこそ、孔子の死生観の象徴というべきものである。人々はこの答えに対してそれぞれに解釈をしており、孔子の死生観に対する認識の違いが見える。単なる言葉の表現を見れば、孔子は人間が「生」のことしか知らなければ、「死」のことを知ることはできないということを認めている。そのため、多くの人が孔子の「生がまだ分からないのに、なぜ死を知る」と言う言葉を「生のことは人生の中で最も重要なことで、まず生を明らかにして解決するまで死の問題を考えるべきではない」と解釈している。そして、このような人生観は「生を重視するが、死を軽視する；生を欲するが、死を嫌う」という現実しか考えない人生の態度であると思っている。

しかし、この「生」はただ人間の生物としての身体の「生」ではなく、生の意義と価値または生き方としての「仁」、つまりいわゆる「死んではいても（心の中で）なお生きている」¹⁹であり、生死一体になると言う意味である。換言すれば、人間はただ「生」つまり「生き方」としての「仁」が分かれば、「死の道」（死の意義、死に方など）のことも分かるということを行っているのである。もし「生」または「生き方」としての「仁」が分からないというのであれば、いかに「死の道」がわかるというのか。従って、我々は孔子の「生がまだ分からないのに、なぜ死を知る」について、『生』つまり『仁の仕方』が分かれば、『死の道』が分かる或いは『生』または『仁の仕方』が分からなければ、『死の道』も分からない」と解釈できる。この意義に基づいて、孔子の生徒孟子は「もし『仁』の志を立てなければ、生涯憂患して辱めて死の境地に至ってしまう」²⁰と言った。

また、朱子は「生がまだ分からないのに、なぜ死を知る」を説明する際、程子の「昼夜とは、死と生のことと同じである。生のが分かれば、死のことを知る；人間のことに仕えれば、鬼のことを知る。死と生、人間と鬼が、一から二に分かれて、二から一になる。このことについて、孔子が季路に教えなかったのは、この問題が深刻でどう知らせるべきか分からないからである」²¹と言う言葉を引用した。そして、このことに対して朱子は「死は、人間がだれでも必ず経験することで、知らなくてはならず、聞くべきである。しかし、もし真実に人間のことをしないなら、神と鬼のことに仕えることはできない；生は必ずしも人間が初めに知ることでではなくて、死も必ずしも人間が後に（終わりに）知ることではない。始めに知ることと終わりに知ることにもともと筋道はないが、学ぶことに前後があるため、順番を越えてはいけない。だからこそ孔子はこういうふう²²に生徒に教えた」と解釈した。言うまでもなく、程子と朱子は生と死に対する問題を一体として捉えており、ただ認識の順番には区別があるだけだと考えている。彼らは孔子の答えは死の問題を逃避することではなく、人々への慎重な忠告であると思っていた。これこそ、生を畏敬する以外に、死を畏敬することはできないという孔子の死生観をはっきりと示しているといえよう。

孔子の「生がまだ分からないのに、なぜ死を知る」の考え方は、「生を重視するが、死を軽視する；生を欲するが、死を嫌う」という態度ではなく、生と死は一体であり認識する順番に前後の区別があるという死生観なのである。

(2) 仁を成すために身を殺す²³；正義のために命を捨てる²⁴

儒家は生を極めて重視するが、「死生が命あり、富貴が天在り」²⁵という考え方におい

ては人間の死と生が一つの自然の変化とみなされている。これはどんな手段でも変えられない自然の規則である。だが、このような死の必然性が認識できるからこそ、人生（生きている時に功績をあげ自ら事業を起すこと）を更に重視する。そのため、「仁を成すために身を殺す；正義のために命を捨てる」という「道」に殉じる説があった。孔子は生と死の問題が我々に解決できないなら、我々ができることは「非命の死」を避けることだと思っていた。同時に、人間は世の中に「道」（人間の正しい道、真理など）、「仁」を求められることもできるし、仁義を実践することもできるので、これらが我々にとって自分で決められることであると考えている。「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」²⁶。さらに人間は自分の命を珍重し、「非命の死」をできるだけ避けるべきである。ただし、いったん「道」と「仁」が生と死にぶつかればまず前者を選ぶべき、つまり「仁愛のある正義の人は生のために「仁」に害を与えることはできず、身を殺して仁を成す」²⁷。したがって、「道」と「仁」は人間に対して単なる生と死より大きな価値があると考えられている。

さらに、孟子の「正義のために命を捨てる」という論点は孔子の「身を殺して仁を成す」の思想を受け継いだ。「生、我の欲するところなり。義もまた我の欲するところなり。二者、兼ね得べからざれば、生を捨て義を取るものなり」²⁸と云う孟子の言葉がある。生きることができればそれは当然いいことであるが、生きられることは人生の第一の目的ではない。我々には遠大な理想があるべきであり、命をつなぐことと理想とは必ずまず理想を選ぶべきで、生きることは後である。孟子も「仁が人間の心である；義が人間の道である」²⁹と云っている。この「仁」は主に人々の内心の善と説明できる。つまり惻隱の情である。この「義」は人生において行動するべき道である。つまり行動において惻隱の情を実践することである。そして、社会にも歴史にもどんなことでも意義があれば、「義」または正義の道と言える。従って、「正義のために命を捨てる」という死生観は命をつなぐことより、「義」に即して行動することに重要な位置を与え、これを人生の第一の目的と見なしている。このことは死の価値が認められたうえで、義を守るために命を捨てることができるというかたちで表現されている。道徳的に、死は一つの価値として是認されている。

2.2 道家思想における死と生の考え方

(1) 生を貴ぶ；死を喜ぶ

道家の死生観には二つの傾向がある。生を大切にしながら積極的に養生の道を追う；一方で、生は苦しく死は喜びとなるので、泰然として死の到来を待つ。道家の学者たちは

明確に生を貴ぶ意識を持つ。老子が「名望と生命を比べると、どちらがより重要なのか。生命と財物を比べると、どちらがより貴重なのか。名利を得ることと生命を失うことを比べると、どちらの結果がより悪いのか」³⁰ということから、「本性を現させて素朴を守る」³¹（いわゆる外部の物事に拘束されないという意味である）という思想を強く主張する。長寿のために「自然の規則に従って、一斉の極端、贅沢などを取り除く」³²、「真の虚無に至る；真の心の清明を守る」³³などを人々に要求する。また、荘子は個体の生命の価値が何ものよりも高いと思っている。「天下を統治することは非常に重要だが、そのために自分の生命に害が与えられることがあってはならないのだから、他のことはいうまでもない」³⁴。そこで、荘子は「物質の世界のなかに迷い込む、あるいは自分の性情が世俗に流される」³⁵ことに反対し、「人事で自然を壊してはいけない；困難や事故などの意外なことで生命を壊滅してはいけない；貪欲のために声名を得てはいけない」³⁶と人々を諭す。

さらに、荘子は「生命を保護し、本性を守り、親しい人を養い、天寿を全うする」³⁷ために、「自然の道に従順する」³⁸と主張する。道家の楊朱学派が更に「生を貴ぶ」というスローガンを掲げ、生が貴ばれるかどうかは行為の価値を評価する基準になるのみならず、生死存亡の根本であると考えている。一方、「生を貴ぶ」の思想が実践において「養生」論のかたちで結実している。これについて、荘子は精神と気を養うことを主にする。例えば、「純粹で素朴な道理は気を守ることである。気を守って失わなければ、精神と一体になる」³⁹。これによって、形と精神が兼ねられる。形は精神を主とし、精神がなければ生命も存在しない。

道家は生を貴ぶが、命を惜しまず死を恐れない。逆に生は苦であって死を喜び、平然と死の到来に対面すると主張する。道家の学者たちにとって、人間の一生は身を苦しんで勤勉に働く過程である。しかし、このような「昼夜兼行で善に至るかどうかを考える」⁴⁰ことは、「一生忙しいのに、何も功績が残らない；仕事のためにくたくたに疲れているのに、努力の方向が見つからない」⁴¹。このことを考慮すると、死は解脱であり休息である。これについては、「天と地が我々に人形の生命を与えることは我々に苦勞させることである。人生はしよせん終わる時があり、年を取ったら休憩させる」⁴²などの言葉に表れている。しかも、人生は苦痛に満ちている。「人間が生まれると同時に憂慮も生じる。長寿の人が毎日無知なままで久しく憂慮したまま死なずにいるのに、なにもそうまでしなくてもいいではないか」⁴³。それゆえ、人々は必ず死ぬという運命を拒否するべきではないだけでなく、悲しんで死ぬべきではない。逆に、死の到来に対して喜ばしい気持ちを抱くべきであ

る。人々がこのことをなすことができれば、ついには死生の知恵を悟ることができる。世間の人が「生」の視点から「死」を見て、「生」の状態によって「死」を拒否するのに対して、道家は「死」の視点から「生」の考察に新しい見方を提供する。さらに、「生」の様々な苦痛と困難を示すことによって、「死」の意義と価値が強調される。

(2) 死生気化

老子は天地万物の変化の一般的な規則にもとづいて、人間の死生の必然性を論じている。「風と雨は天地に作られるものなのに、久しく存在できない。天地でも永遠に存在できないのだから、人間ならいうまでもない」⁴⁴。それゆえ、死生には必ずそれぞれの定数がある。また、老子は人間と自然の死生変化が「道」の「陰陽」という二つの「気」に決められていると考えている。「道は唯一無二であり、その中には元々陰陽の二つの気が含まれていて、この二つの気が交わって適度で平均な状態になり、万物がこの状態から生まれる。万物が陰を避けて陽に向かい、陰陽の二つの気が相互に交わる状態の調和によって新しい形になる」⁴⁵。荘子が老子のこの思想を広げた。天地万物は本質的にその「気」の中に通うと言える。人間の死生は「気」の流れと変化における離合集散の結果にすぎない。「人間の誕生は気の集まったものである；気が集まるなら、生命になり、気が離散するなら、死になる。もし死と生が同類であれば、死に対して我は何か憂患があるのか」⁴⁶。しかも、気の離合集散の変化、万物の死生の転化あるいは「物化」によって、つまり無条件、無限界に自由な転化の過程によって死生は実現されている。そのため、人間の死生は元々一つの「物化」の過程であり、自然の気に変化するうえでの異なった形態である。「存在する時は、自然の規則に従って行い、死んだ後他の物と融合される」⁴⁷。そして、気の離合とモノの転化とともに、人間の生と死は継続的に交替して変化している。「万物が絶えず成長し、絶えず消えてなくなる」⁴⁸、死は生命が絶対的に終わることではない。だから、もし生と死が同類であり「気」によって転化されるということを認識できれば、生に対して喜ぶ必要もないし、死に対して悲しむ必要もないことを自覚できる。それゆえ、荘子は自分の妻の死を悲しむのではなく「鼓を叩きながら歌を歌った」⁴⁹のであり、最も達観した死生に対する態度をとった。

2.3 中国仏教における死と生の考え方

仏教が中国に入った後、もともとあった善男善女の世界と生死に対する惑いや畏敬、仏

教の靈魂・因果応報・輪廻転生などの説が溶け合って新しい死生観になった。更にこの死生観は道徳的な教えとなった。死後の魂は生前の善と悪の行為によって極楽世界に昇ったり、新しい人間になったり、豚や犬や牛などの生物になったり、鬼になって地獄に墮ちたりすることを人びとに信じさせていた。この輪廻転生の思想の影響のため、中国人は生前の行為に注意をはらうだけでなく、死後の霊と魂の落ち着く先を極めて重視する。死後の魂が安息を得ることができるよう、僧侶を自宅に呼んで、経文を唱え、法事を行い、亡霊をしのぶことによって死者の生前の染みと汚れを清める。

また、「生」と「死」の問題について、仏教は「三世」、「因果応報」、「極楽世界」などの説を体系的に述べている。仏教によれば、人間には前世、現世、来世の三世、先報、現報、来報の三報がある。三世において靈魂は不死不滅であり因果応報は輪廻する。人間の一生は生と死の循環、輪廻の過程である。この過程では生前の業に応じて死後の行先または来世が決まる。極楽、地獄、畜生道、鬼、阿修羅、人間の六つがあり、これを「六道輪廻」という。これが仏教でよく言われる「因果応報」である。つまり、中国人がよく言うところの「善い事をすれば善い報いがあり、悪い事をすれば悪い報いがある」ということである。実際には、「生死輪廻」、「因果応報」は人間の外在的な道徳的拘束から人々の内在的な道徳的拘束のメカニズムになる。人々が日常の道徳的行為と運命の主導権を自分の手に委ねられたものとしたからである。この道徳の説の影響の下に、身分の高低に関係なく、中国人は来生があるということを知っている。加えて、来生に高官や身分の高い人になるのか、或いは豚や犬などの畜生になるのかということに関心を持っている。従って、この仏教の教義と死生観は儒家の道徳よりさらに説得力があり、千年以来中国人の道徳倫理において一つの精神の柱になった。

仏教は人間が元々一つの苦難であり、人間の一生が苦に満ちていることを認める。「四諦」の「苦諦」より、人間の一生において、「生」、「老」、「病」、「死」、「愛別離苦」、「怨憎会苦」、「求不得苦」、「五陰盛苦」⁵⁰ という「八苦」は不可避であり、人間の人生は「苦界果でなければ、振り向けば岸」⁵¹ である。そのため、死は悪いことと言えないだろう。しかし、人間は死ぬれば必ず苦難を抜け出すことができると仏教は確信しない。人間は真なる覚悟に達したときのみ、苦難を抜け出すことができる。人間の苦難の根源は色欲、長寿、権力、金銭などの欲望が永遠に満足されないことにあり、そこから苦痛が生まれる。或いはその欲望に由来する意識と行為によって深刻な結果を招き、「自業」を「自得」する。更に、現世の「業」は来世の「果」になり、生と死を輪廻する。従って、死生の輪廻を超脱するために最も重

要なことは欲望を消すことである。欲望がなければ「業」は生まれない。「業」がなければ、「業」の輪廻はなくなる。これによってのみ、絶対的に不死不滅の極楽世界に達することができる。これが仏教の「滅諦」ということである。しかし、極楽世界に昇るために、人々は一切の欲望を断念し、自分の雑念と行為を律し、外界の誘惑に抵抗しなければならない。この仏教の教義は儒家の「仁を成すために身を殺す；正義のために命を捨てる」という信念を実現するためもがき苦しんでいる者に息をつく機会を与えた。

仏教は現世の功德を積むことを重視し、葬式を簡素化することを勧める。これは死体を処理する手段によって表される。仏教の火葬は中国数千年以来の伝統的な死体の処理方法、すなわち土葬とは異なる。火葬もまた儒家の死生観を主とする考え方と遺体の処理方法の変化を促した。

おわりに

現在、医療技術の進歩と社会体制の変化などが、既存の道徳では処理できない問題を引き起こしている。それに伴って人々の既存の人生観と倫理観が見直され、医療が抱える課題に対しても考え方や対処の仕方で大きな変化が見られるようになった。日本と中国は儒家思想や仏教を背景とするが、死生観についてそれぞれに固有の文化的特徴があり、死の受け入れ方や意味づけ方、死後の世界の考えなどについて一致する点と相違点とが存在している。これは生命倫理の諸問題に反映していると言われている。例えば、臓器移植や人工妊娠中絶などの生命倫理上の問題は、日本でも中国でも問われている。両国での脳死体からの臓器移植の少なさと人工妊娠中絶の多さという事情に対しては、比較文化論（死生観）的観点から説明できると思う。とりわけ終末期医療は、両国の高齢化率がますます高まっていることに応じて、両国の非常に重要な問題になった。医療の現場において、患者とその家族、医療関係者が延命治療を望むのか、自然な死を選ぶのか、どのような態度で臨終の生活に向かうのかといった問題は、それぞれの死生観の特徴と密接な関係がある。この問題を明らかにするために、十分な研究が待たれるところであると思う。

参考文献

- 1 加地伸行氏『沈黙の宗教—儒教』、筑摩書房、1994年。
- 2 田畑邦治氏「日本人の伝統的な死生観の読み直し」、『生と死を考える会』、<http://www.seitosi.org/library/shoroku/25.html>。
- 3 「日本人の宗教観」、<http://homepage2.nifty.com/path/shukyo.html>。
- 4 丸山久美子「死生観の心理学的考察」、『聖学院大学論叢』16(2)、189-218頁、2004-03-25。
- 5 李璐璐(リ・ルル)「美しく生き 美しく死ぬ—武士道の死生観—」、<http://www.iie.hiroshima-u.ac.jp/center/activities/japanese/pdf/2006/li.pdf#search='%E6%AD%A6%E5%A3%AB%E9%81%93%E3%81%AE%E6%AD%BB%E7%94%9F%E8%A6%B3'>。
- 6 島蘭進『日本人の死生観を読む 明治武士道から「おくりびと」へ』、(朝日選書)、朝日新聞出版(2012/2/10)。
- 7 高瀬武志「武士道思想における死生観に関する一考察—『五輪書』『兵法家伝書』を中心に—」、『順天堂スポーツ健康科学研究』、第3巻第3号(通巻61号)、167～175頁(2012)。
- 8 熊沢一衛「現代日本人の死生観の形成—仏教の役割と提言—」、[http://library.nakanishi.ac.jp/kiyou/gaidai\(37\)/01.pdf#search='%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E6%AD%BB%E7%94%9F%E8%A6%B3%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6'](http://library.nakanishi.ac.jp/kiyou/gaidai(37)/01.pdf#search='%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E6%AD%BB%E7%94%9F%E8%A6%B3%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6')。
- 9 「現代死生観について」、2012/04/08-09 STS 第31回研究会、6/15 STS 第32回研究(伊藤)、<http://www.sts.or.jp/gnr/Articles/siseikan.pdf#search='%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E6%AD%BB%E7%94%9F%E8%A6%B3%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6'>。
- 10 中村俊哉、中島義実、胡金生「死生観の日中比較 靈魂観に差異はあるか」、『福岡教育大学紀要』、第55号、第4分冊、203－221頁(2006)。
- 11 黄欣「日本と中国の諺から見る 人生観・死生観について」、<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/8401/1/koukin03.pdf#search='%E6%AD%BB%E7%94%9F%E8%A6%B3%E3%81%AE%E6%97%A5%E4%B8%AD%E6%AF%94%E8%BC%83'>。
- 12 『死生学研究特集号 日中国際研究会議「東アジアの死生学へ』、東京大学大学院人文社会系研究科、2009年3月25日。
- 13 山折哲雄『死の民俗学 日本人の死生観と葬送儀礼』、岩波現代文庫「学術」、2012年8月16日。
- 14 范景武「论神道生死观的内核与实质」、『延边大学学报社会科学版』、2009年02期。
- 15 岸英司「论日本人的生死观 从日本人的宗教意识谈起」、『铁道师院学报』、1997年06期。

- 16 闫志章「日本神道文化」、《河北联合大学学报(社会科学版)》、第12卷第2期、2012年3月。
- 17 王钦「浅谈佛教对日本人生观的影响」、《佳木斯教育学院学报》、2012年06期。
- 18 梁琳「儒、道、佛」生死观认识与比较」、《学理论》、2009年第11期、27-28頁。
- 19 李伟波、「安乐死与中国传统生死观」、《中国矿业大学学报(社会科学版)》、2004年12月第4期、127-129頁。
- 20 尤吾兵、陈保同「传统伦理思想的突破：破解临终关怀开展困境的路径」、《医学伦理学·卫生软科学》、2010年10月第24卷第5期、426-428頁。
- 21 丁秋冬「传统生死观的哲学阐释」、《跨世纪》、2008年11月第16卷第11期、50頁。
- 22 任静伟「从「重生」到「知死」—简论孔子的人生哲学观」、《淮海工学院学报(会科学版·学术论坛)》、2011年11月第9卷第21期、15-18頁。
- 23 刁生虎「道家生死观的理论内涵及现代价值」、《佛山科学技术学院学报(社会科学版)》、2003年4月第21卷第2期、8-11頁。
- 24 李聪「傅伟勋「现代生死学」的意义」、《医学と哲学·医学伦理学理论研究》2012年7月第33卷第7A期总第456期、13-15頁、48頁。
- 25 李栋「孔子生死观探析—以《论语》为例」、《历史哲学》、总第287期、113-114頁。
- 26 郑晓江「老庄生死观探微」、《江西师范大学学报(哲学社会科学版)》、2006年4月第39卷第2期、18-22頁。
- 27 郑晓江「论生死学与生死哲学」、《江西师范大学学报(哲学社会科学版)》、2008年2月第41卷第1期、31-35頁。
- 28 王瑞军「论现代生死观的哲学意蕴」、《医学と哲学·医学伦理学理论研究》、2012年7月第33卷第7A期总第456期、16-19頁。
- 29 张秀峰「中国传统生死观的伦理内涵及现代启示」、《医学与社会·医学伦理探讨》、2009年7月第22卷第7期、52-53頁。
- 30 江新建「论佛教对中国人生观的影响」、《求索》、2013年2月21日。
- 31 汤一介「儒、道、佛的生死观念」、国学网——国学文库、<http://www.guoxue.com/wk/000259.htm>。

注

- 1 島藺進「人の救済観と死生観—近代から現代へ—」、《モラロジー研究》(講演)、No.63、2009、3頁。
- 2 清水徳蔵、「日中の死生観比較考—異文化への日中の対応比較(3)—」、4頁、Asia University、NII-

Electronic Library Service。

- 3 同上。
- 4 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳『武士道』、岩波文庫、昭和43年2月10日第9刷から転載、<http://www.geocities.co.jp/Berkeley/4549/busido.html>。
- 5 「勇一武士道—key: 雑学事典」、<http://www.7key.jp/data/bushido/yuu.html>。
- 6 このアンケート調査は、日本人を対象とした生および死に対する意識調査を通じて、日本人の死生観に関わる要因を分析・考察することを主旨とする。2011年3月12日から5月29日にわたり、大阪大学の学生（「哲学概論」を受講する医学部保健学科の学生（83名）と「臨床哲学講義」を受講する人文系の学生（96名））、および大阪大学中之島センターで行われたシンポジウム「高齢社会における人工栄養を考える」に参加された市民（71名）を対象に行った。対象者総数は、男女合わせて日本人249人、うち20歳以上は236人、20歳以下は女性が13人であった。
- 7 森下直貴「<無形のものたち>のリアリティ——日本人の死生感の現在」『死生学研究特集号』、東京大学学院人文社会系研究科、2009年3月25日、61頁。
- 8 梅原猛『地獄の思想—日本精神の一系譜』、中央公論新社、2007年5月25日、28頁。
- 9 「ウィキペディア百科事典」の項目「神道」による。
- 10 デジタル大辞泉による。
- 11 范景武、《论神道生死观的内核与实质》、延边大学学报（社会科学版）、2009年4月第42卷第2期、62-67頁。中国語の原文は「即它是实现神向人的人格化和人向神的格化的媒介或桥梁，是统一内清净和外清净的过程或手段，是达成神人一体的环节或途径」である。
- 12 伊藤泰男「現代死生観について」から転載、2012年6月15日科学技術社会(STS)研究所第32回研究会。
- 13 「天皇の火葬、中世は一般的 葬法、時代の価値観反映か」、文化トピックス—文化、朝日新聞(2012年5月9日)。http://www.asahi.com/culture/news_culture/TKY201205090243.html
- 14 石川公彌子「近代日本人の死生観」『死生学研究特集号』東京大学学院人文社会系研究科、2009年3月25日、19頁。
- 15 同上20頁。
- 16 中国語原文は「未能事人、焉能事鬼」である。
- 17 中国語原文は「未知生、焉知死」である。
- 18 この故事の出典は『中国国学網』というウェブの「论语・先進第十一」（<http://www.confucianism.com.cn/detail.asp?id=30505>）。
- 19 中国語原文は「死犹生」である。訳文は『词典网』というウェブ（<http://www.cidianwang.com/>）

search/jp/?q=%E7%8A%B9) による。

- 20 中国語原文は「苟不志于仁、终身忧辱、以陷于死亡」である。『百度百科』というウェブの「孟子・离娄上」(<http://baike.baidu.com/view/3708298.htm>) による。
- 21 中国語原文は「昼夜者、死生之道也。知生之道、则知死之道；尽事人之道、则尽事鬼之道。死生人鬼、一而二、二而一者也。或言夫子不告子路、不知此乃所以深告之也」である。朱熹『四书集注』、中国书店 1994 年版、113 頁。
- 22 中国語原文は「死者、人之所必有、不可不知、皆切问也。然非诚敬足以事人、则必不能事神；非原始而知所以生、则必不能反终而知所以死。盖幽明始终、初无二理、但学之有序、不可躐等、故夫子告知如此」である。朱熹『四书集注』、中国书店 1994 年版、13 頁。
- 23 中国語原文は「杀身成仁」である。『对外漢語網』というウェブの「『论语·卫灵公』全文及翻译」(<http://www.tcf.cn/article-174-2.html>) による。
- 24 中国語原文は「舍生取义」である。『360 个人图书馆』というウェブの「孟子·告子上」(http://www.360doc.com/content/06/0608/17/3041_130779.shtml) による。
- 25 中国語原文は「生死有命、富貴在天」である。『百度百科』というウェブの「论语·颜渊」(<http://baike.baidu.com/view/6777119.htm>) による。
- 26 中国語原文は「朝闻道、夕死可矣」である。『「論語」の言葉』、一個人編集部、2012 年 4 月 25 日初版第 2 印刷発行、87 頁。
- 27 中国語原文は「志士仁人、无求生以害仁、有杀身以成仁」である。『四書集注』というウェブの「『论语·卫灵公第十五』菁华选粹」(<http://www.dfg.cn/gb/chtwh/ssjz/16-lunyu-wlg.htm>) による。
- 28 中国語原文は「生、亦我所欲也；义、亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而取义者也」である。『360 个人图书馆』というウェブの「孟子·告子上」(http://www.360doc.com/content/06/0608/17/3041_130779.shtml) による。
- 29 中国語原文は「仁、人心也；义、人路也」である。『360 个人图书馆』というウェブの「孟子·告子上」(http://www.360doc.com/content/06/0608/17/3041_130779.shtml) による。
- 30 中国語原文は「名与身孰亲。身与货孰多。得与亡孰病」である。『国学智慧』というウェブの「道德经 四十四章 名与身孰亲」(<http://www.sophia.net.cn/gu/folder1/2007917/1162.Html>) による。
- 31 中国語原文は「见素抱朴」である。『百度百科』というウェブの「见素抱朴」(<http://baike.baidu.com/view/179003.htm>) による。
- 32 中国語原文は「去甚、去奢、去泰」である。『实修驿站』というウェブの「老子道德经全文」(第二十九章) (<http://www.shixiu.net/nanshi/zhuozuo/lzts/4294.html>) による。

- 33 中国語原文は「致虚极、守静笃」である。『实修驿站』というウェブの「老子道德经全文」（第二十六章）（<http://www.shixiu.net/nanshi/zhuzuo/lzts/4294.html>）による。
- 34 中国語原文は「夫天下至重也、而不以害其身、又况他物乎」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・杂篇・让王」（第二十八篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p28.htm>）による。
- 35 中国語原文は「丧己于物、失性于俗」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・外篇・缮性」（第十六篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p16.htm>）による。
- 36 中国語原文は「以人灭天、以故灭命、以得殉名」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・外篇・秋水篇」（第十七篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p17.htm>）による。
- 37 中国語原文は「可以保身、可以全生、可以养亲、可以尽年」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・内篇・养生主」（第三篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p3.htm>）による。
- 38 中国語原文は「缘督以为经」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・内篇・养生主」（第三篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p3.htm>）による。
- 39 中国語原文は「纯素之道、唯神是守、守而勿失、与神为一」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・外篇・刻意」（第十五篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p15.htm>）による。
- 40 中国語原文は「夜以继日、思虑善否」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・外篇・至乐」（第十八篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p18.htm>）による。
- 41 中国語原文は「终生役役而不见成功、茶然疲役而不知所向」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・内篇・齐物论」（第二篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p2.htm>）による。
- 42 中国語原文は「夫夫块载我以形、劳我以生、佚我以老、息我以死」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・内篇・大宗师」（第六篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p6.htm>）による。
- 43 中国語原文は「人之生也、与忧俱生。寿者恬憺、久忧不死、何苦也」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・外篇・至乐」（第十八篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p18.htm>）による。
- 44 中国語原文は「故飘风不终朝、骤雨不终日。孰为此者？天地。天地尚不能久、而况于人乎」である。『古典文学』というウェブの「老子・道德经（二十三）」（<http://www.gudianwenxue.com/article/2971.html>）による。
- 45 中国語原文は「道生一、一生二、二生三、三生万物、万物负阴而抱阳、冲气以为和」である。『古典文学』というウェブの「老子・道德经（四十二）」（<http://www.gudianwenxue.com/article/2952.html>）による。
- 46 中国語原文は「人之生、气之聚也；聚则为生、散则为死。若死生之徒、吾又何患」である。张耿光译注『庄子全译·知北游』、贵州人民出版社 1991 年版、380 頁。

- 47 中国語原文は「其生也天行、其死也物化」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・外篇・刻意」（第十五篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p15.htm>）による。
- 48 中国語原文は「方生方死、方死方生」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・内篇・齐物论」（第二篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p2.htm>）による。
- 49 中国語原文は「妻死、鼓盆而歌」である。『Midnight Star』というウェブの「庄子・外篇・至乐」（第十八篇）（<http://www.ziyexing.com/files-5/zzbj-zz-p18.htm>）による。
- 50 ウィキペディア百科事典（四諦）による。
- 51 デジタル中日辞典による。